

## 休校下での学習指導上配慮すべきこと

代々木ゼミナール教育総合研究所  
シニアコンサルタント 荒居 隆行

新型コロナウイルスの蔓延により、休校を余儀なくされている学校にお勤めの方は、読者の皆様の中にも大勢いらっしゃるのではないのでしょうか。通常の対面授業に代わる何らかの学習指導を施されている例もあるでしょう。特に、ネット環境と設備が許される場合、対面に代わってオンラインの授業を実施しているという学校も数は多くないもの、一定数に上っているようです。それが許されない場合でも、業者のサービスを利用したり、学校独自の教材を用意したりして、生徒に学習を促す努力をされているのであらうと拝察いたします。

一方で、生徒との直接の対面がかなわない学校で、いくつか課題も浮上しています。現在のところ統計をとるということはできていませんが、散発的に伺うお話では、何よりも生徒によって学習への姿勢にバラツキが大きく、その指導上管理上の方策がなかなか見いだせないということに尽きるのではないかと思います。今回は、この問題を取り上げ、対面による平常授業が難しいなか、指導者側としてどのような点に気を遣う必要があるか、考えてみたいと思います。

### 一、浮上した問題

私どもに伝えられた学校での課題のうち、比較的多いのが次のようなものです。

1. ネットでの授業配信をしているが、一方通行であって生徒の理解が得られているか心許ない。
2. 同様にネットでの授業配信をしているが、どうもきちんと取り組んでいる生徒と、そうではない生徒がいて、後者についての学力停滞、低下が心配である。
3. ネット配信ではなく、学校から課題を指示して取り組ませているが、回収率が思わしくなく、学習に気が向いてない生徒の現状がとても心配である。

といったものです。このうち、2と3は、ネット配信の有無とは関係のない問題で、総じて「生徒の学習意欲の喚起」ということに行き着く共通の課題であるといえるでしょう。そこでこの小稿では、1の指導が一方通行であることについてと、2および3の学習意欲の喚起の二点について、検討したいと思います。

## 二、一方通行の問題

学校としてネットを利用している形態はさまざまです。動画を動画サイトにアップして生徒に知らせて見るように促すというものが多そうですが、それよりは簡易な方法として、業者と契約をして、業者が作成・供給する動画を視聴させるというケースも多いようです。いずれも生徒は完全に受け身の態勢といえ、教育的な効果は生徒の学習への姿勢に大きく依存していることは間違いありません。なかには、双方向の通信を模索している学校もあります。ただし、以下のような課題があるようです。

- ① 学級すべての生徒との共時性を如何に確保するか。
- ② 費用
- ③ 学校側の設備
- ④ 授業準備が、それなりに重くのしかかること
- ⑤ 生徒の側のネット環境が貧弱であること

このうち①の共時性問題は、できあがっている時間割どおりに行うということが前提となるわけですが、平常時の学校という場と違い、出席の確保が大きな問題となります。後述の「学習意欲の喚起」(すなわち前述の2と3の共通問題)の課題が立ち上がるわけですが。さらに、生徒によっては家庭での学習環境が必ずしも最適とはいえないケースもあり、出席確保がおぼつかないのでしょう。

費用や学校側の設備、そして授業準備(上述②～④)は言わずもがなののですが、意外に問題になるのは、⑤の生徒の側のネット環境の貧弱さです。ある高校の調査では、ネット配信授業についてそれを受ける生徒の設備が、スマホだけという割合が約85%に上りました。家庭にパソコンやタブレットが皆無という家庭も多く、仮に保護者のパソコンがあったとしても、急なテレワークで私用のパソコンを使って仕事をせざるを得ない親にとって、それを子どもの学習に回すことは困難であるというケースも多いようです。これが中学であれば、このスマホのみという割合はもっと高く、あるいは、それすらないという生徒も多くなるはずです。

スマホで双方向の授業は困難でしょう。実は双方向授業どころか、動画配信を1日に6時間見ろというのも、スマホのみの子どもにとっては、拷問に等しいかもしれません。学校側、先生方の熱意とは裏腹に、現在の平均的な家庭のネット事情は、ネット動画での授業はもちろん双方向授業には全く対応できない程度であることは、強く意識しておく必要があります。従って、一方通行の指導であることの克服は、ICTによる技術的な解決策とは別のところに求めたほうがよさそうです。

実は一方通行になりがちであるということは、何も今回の休校に対する対応を待つまでもなく、伝統的な通信教育一般に当てはまることです。この小稿を読まれている先生方の中には、教員免許取得の際、大学通信教育を利用された方もいらっしゃると思います。その教育形態はほぼ完全に一方通行だったのではないのでしょうか。大学の通信教育では、単位認定の最終試験のほかに、取得単位数に応じて1～2回の課題が課され、それによって一方通行

性のいくらかが解消されるようになってはいます。しかし、基本的に教材が供給され、学生の自助努力のみで、単位取得に至るというプロセスにとどまることは否定できません。

初等・中等教育では、さらにきめ細かな配慮をしないと、到達度の観点からさまざまな弊害も出てくる可能性があります。ここはやはり課題と確認テストを比較的回数多く行うという工夫が必要でしょう。単元ごとの到達度を測る課題でもよいでしょうし、単位数が少ない授業であって、しかも煩を厭わないのであれば授業ごとに終末課題を出していくのも双方向性の担保のみならず、現実の学習指導上の効果がありそうです。要するに生徒の側から担当教員に成果を示し、それに対するフィードバックをきちんと、数多く行うということに尽きるのではないかということです。

### 三、生徒の学習意欲の喚起

遠隔の指導を行っている、ネットを利用してはいるが、そうでなかろうが、取り組みのよい生徒が目立ち、一方で全く音沙汰のない生徒というものも一定数出てくるようです。遠隔であるがゆえに指導者側としては非常に気になるわけですが、眼前に生徒がいるわけでもなく、そうそう呼びつけて面談に持ち込むこともかなわず、気が気でない思いをしますでしょう。

しかし、考えてみると、平常時にあっても勉強に対してとりつきのよい生徒と、そっぽを向いている生徒はいるわけです。休校となって実際の生徒と接する機会を失って、却って先生方としてはそのことが強く迫ってきて、重くのしかかるのではないのでしょうか。

では対策としては何が考えられるのでしょうか。平常授業ができているときであれば、それとなく呼び止めて話をするというのもあるでしょうし、特別な学習指導——補習や課題——を課して、ある程度の強制力を発揮した強い指導も行うことができます。ただ、それとて実際の効果が思ったほどではないという経験をされた先生も多いのではないのでしょうか。ましてや、遠隔指導の状況ですからこうした方法は採りたくても採れません。電話をかけて言葉で指導しても、基本的に同じことで馬耳東風となる生徒は必ず出てきます。そのうち電話に居留守を使う者もあらわれるかもしれません。

私どもは、学校の進学指導の状況を拝見して課題を発見して改善の方向をご提案する業務を行ってきましたが、その際に、特に着目する事柄の一つに、学習の動機付けとしての、ピア効果（Peer Effects）の利用というものがあります。いろいろな方法がありますが、多くの学校で一定の成果があがっているやり方として、生徒が自由に利用できる自習室を「見える化」というものがあります。自習室のドアや窓が外からよく見るように改良し、できれば生徒の通行量の多い場所に設置するというものです。放っておいたのでは、誰も利用しないようであれば（負の効果になる恐れもある）、教科指導の先生方が、特定生徒に働きかけて利用させるということも含んでよいでしょう。

生徒の目からすると、「～～（友だち）があそこで勉強している」という認識が得やすく、

要するに「焦る」ことになります。この方法は、通常は学習への動機付けがしやすい時期の生徒に強い反応が起きやすいのですが、低学年の生徒でも一定の効果はあり得ます。この手法を遠隔指導に応用するというのはどうでしょうか。

仮に遠隔指導にネットを利用しているのであれば、二で申し述べた課題や確認テストの取り組み状況、成果をそれぞれ「見える化」というのもよいでしょう。ネットの状況で個人情報保護を優越させる必要がある（公開のサイトなど）場合は、学級と出席番号といった符号による表示でも十分に伝わります。

ネットを指導に使われていない場合でも、担任や教科からの指示のために定期的、ないし不定期にメールは利用しているのではないのでしょうか。そこに同様の取り組みの状況などを添付により示してもよいかもしれません。

要は、生徒の内発的なやる気を引き出す工夫として、一生懸命取り組んでいる生徒がいるという事実を伝えればよいわけです。もちろん、それをしても乗ってこない生徒はいるでしょう。100%を目指すのではなく、少しでも多くの生徒の気持ちを学習に向けて行くにはどうするかという視点で、おおらかに取り組めばよいのではないのでしょうか。

(おわり)